

巡回展

あおり旅ものがたり～青森の名所と交通の歴史～



種差海岸・蕪島付近：「八戸市鳥瞰図原画」昭和28（1953）年



青森会場展示風景
(青森県立美術館・展示室A)



青森会場特集展示「十和田湖・奥入瀬を描く」
(青森県立美術館・展示室B)

県内各地を旅した巡回展、閉幕

「旅」をテーマに県内3か所を巡って開催した巡回展。各会場で多くの方に御観覧いただき、好評のうちに閉幕しました。

最終会場の青森県立美術館では、他の会場で展示した資料に加え、川口月村作の「日本鉄道陸奥地方画譜」(うち青森県内分2.5景)や吉田初三郎作の「八戸市鳥瞰図原画」(上図：部分)、「青森郷土かるた」などの実物資料を追加展示しました。また、青森県立美術館と当館の所蔵作品の中から、青森県の代表的観光地である十和田湖と奥入瀬渓流を題材にした本県ゆかりの画家たちの作品や、十和田湖のシンボルである「乙女の像」の制作に関連した高村光太郎作の「手」・「試作小型群像」などを紹介する特集展示も行いました。

今回の巡回展では、各会場で周辺地域に関連する資料を入れ替えて展示したため、「会場ごとに展示内容が違いおもしろかった。」「地元の歴史について知ることができて良かった。」という声もいただきました。そして、展示を御覧になった多くの方に、「旅」という視点から、あらためて青森県の魅力を感じていただけたのではないかと思います。

現在当館は長期休館中ですが、今後も様々な機会を通じて収蔵資料を紹介していきたいと思っております(担当 滝本)。

巡回展「あおり旅ものがたり」関連講演会

巡回展青森会場（青森県立美術館）で開催された講演会から12月3日(土)の「鉄道開業150年記念 青森の鉄道」（講師 当館職員・佐藤良宣）と1月14日(土)の「風に吹かれて－美術と旅－」（講師 当館ゲストキュレーター・岩井康頼氏）を紹介します。

■「鉄道開業150年記念 青森の鉄道」

講師 学芸主幹 佐藤良宣

期日 12月3日(土) 会場 青森県立美術館ワークショップA

日本政府は明治初年から東京－東北間の鉄道建設の意図を持っていましたが、資金調達の方法が課題であり、様々な方が模索されました。やがて、株式会社を設立して、華族や民間等から広く資金を集める、という提言を官僚のグループが行い、構想は実現に向かいます。こうして明治14年に設立された日本鉄道株式会社は、東京－青森間の鉄道を建設することとなりました。

この当時、弘前周辺の有志は地元への鉄道誘致を熱望し、東京－青森間の鉄道の建設計画を鹿角郡・津軽郡経由に変更する意見書を岩倉具視に提出したり、秋田県境から青森までの鉄道誘致運動を行ったりしました。しかし、明治24年、東京の上野から青森までの鉄道は野辺地・三戸経由で完成しました。こうして建設された鉄道は、人々や物資の動きを大きく変えました（歴史担当 佐藤）。

■「風に吹かれて－美術と旅－」

講師 ゲストキュレーター 岩井康頼氏

期日 1月14日(土) 会場 青森県立美術館ワークショップA

講演テーマ「風に吹かれて」は、ボブ・ディランの曲（Blowin' In The Wind）からの引用です。1960年代の公民権運動の賛歌といわれ「どれだけ爆弾を落としたら平和が来るの」と歌われる曲です。

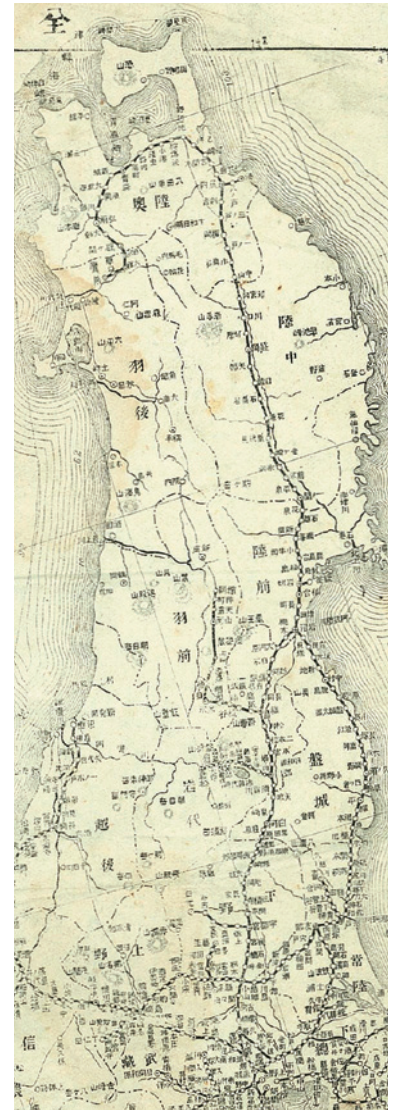
学生時代絵が描けなかったとき、愛知県長久手市の古戦場跡で地蔵の「拓本刷り」をはじめた事から「拓本刷り」巡りをするようになったこと、また、原爆の熱線で建物の外階段に焼き付けられた「人影の石」から啓示を受けたというイヴ・クラインの「ポジとネガの作品」

（人体を拓本にした作品）に出会ったことが、岩井氏自身の創作活動につながったといえます。

縄文土器のデザインや人類最古の洞窟壁画について取り上げるなど幅広い視点から、時間を超えての美術の旅を紹介。アートの本格的な価値や魅力は、作品を自分なりに読み解いて楽しむことであり、見る人の思想や人生観に向き合うことにあると語りました。

そして、高村光太郎の遺作「乙女の像」について、妻である智恵子への思いが「鎮魂のかたち」として昇華したものであることを、彼の詩を交えて紹介しました。

会場には、岩井氏による銅版画や拓本作品も並べられ、作品や講演会の内容への質問にも丁寧に対応していただきました（報告・美術担当 中村）。



「全国鉄道路線明細図」(明治34年)より



十和田湖畔にたたく乙女の像
岩井康頼氏撮影

「出前授業」の現場から～あんなこと、こんなこと

実物資料を使って授業を行う「出前授業」の現場からの報告です。

出前授業は、学習のねらいに沿った効果的な資料を学校に持参し、授業の中で解説と体験活動を行うプログラムです。小学校をはじめとして、中学・高校にも対応可能ですが、主に小学校3年生の単元「市のうつりかわり」「古い道具と昔の暮らし」の申込みが大半を占めます。単元実施時期の関係から、12月から3月に申込みが集中しています。昨年度は館内の展示や資料を使ってオンラインでの遠隔授業も行いました（写真①）。

授業の流れは、最初に当館の紹介と授業の流れを話し、次に衣・食・住の各コーナーで資料の説明や使い方の解説を行った後、体験活動を行い終了となります。多くの実物資料を目の前に並べると、子どもたちから歓声があがることも多く、説明を真剣に聞いてくれます。体験活動では、洗濯板を使った洗濯体験や石臼でのきな粉づくり、天秤棒を使った水桶担ぎ（写真②）などが人気です。

この単元の出前授業で特に紹介したい資料は、「安全行火^{あんか}」（写真③）です。行火は暖房器具の一つで、主にこたつの中に入れて使われました。中に炭火を入れて温めるのですが、気を付けないとこたつの中で足を火傷したり、蹴り飛ばして炭火や灰が散らばったりして、火事になってしまうこともありました。そこで考えられたのが、「安全行火」です。これは、大正時代頃から出回り、炭火を入れる部分が鉄製の半球状になっていて、木製の格子状の入れ物に納まる構造になっています。炭火が入った部分は、ひっくり返しても転がしても上を向く様になっており、炭火や灰はこぼれません。このように安全に使える行火なので、「安全行火」と呼ばれています（教育普及担当 中沢）。



①郷土館展示室からオンラインでねぶたを解説



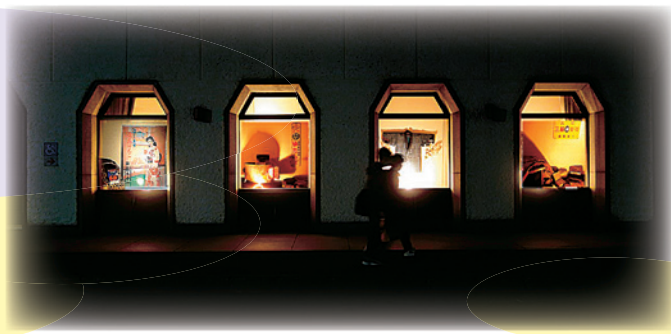
②天秤棒を使って水桶担ぎ



③安全行火
一辺が13cm、高さは26cmの格子状になっています。

冬を暖かく・・・

四季を感じる ナイトミュージアム 開催中



現在、郷土館東側の通りに面した窓を「ショーウィンドウ」に見立て、資料をライトアップして展示しています。休館により賑わいの消えた当館に、明るさを取り戻したいという思いからスタートして3年目。春は華やかな「北国のさしこ着物」、夏は涼しさを呼ぶ「夏の風物詩」、秋は収穫を祝って「りんごの街あおもり」、そして現在は「冬を暖かく」と題して昔の採暖用具を展示しています。「展示替えが楽しみです」「通りが明るくなり安心できます」という声をいただき、休館中の当館にとって大きな励みになっています。

窓を使って展示を行うことには、もう一つの意味があります。かつてこの場所には、明治時代から続く和洋雑貨食品店がありました。店先に並ぶ洋酒、缶詰、舶来菓子、洋傘などは、道行く人々に文明開化の息吹を届けていたことでしょう。夕暮れどき、郷土館の「ショーウィンドウ」から漏れるやさしい明かりに往時の雰囲気を重ね、かつて青森随一の商店街であった街の歴史にも思いを馳せていただけたら嬉しく思います（民俗担当 増田）。

新収蔵資料紹介

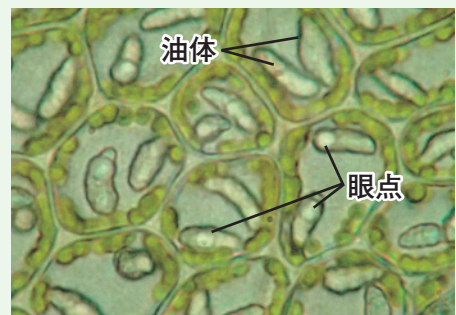
ホリカワツボミゴケ (*Solenostoma horikawanum*)

2018年から行った「中南津軽地域自然調査」では、約1600点のゴケ植物を収集しましたが、その中には県内での初記録となる種を10種ほど含みます。その一つが、ここで紹介するホリカワツボミゴケです。このゴケは、西南日本の照葉樹林帯に多い種ですが、福島県や秋田県でも記録があります。2021年の調査で、大鰐町の公園の標高110m位の石の階段で見つかり、今のところ最北限の記録となりました。ホリカワツボミゴケは、県内の低地の土によく見られるオオホウキゴケ (*Solenostoma infuscum*) と似ていますが、仮根の色がそれより紫色を帯び、油体は細長い楕円形で1-2個の眼点を持つこと、土ではなく岩石上に生育することなどで区別ができます。名前は、和名も学名も、このゴケを最初に図説した堀川芳雄教授を記念してつけられました。

ゴケ植物は、ちょっとした環境変化に敏感に反応して、消失してしまうことがよくあります。公園内のただ1か所の確認だけでは心許ないので、さらに他の生育場所も探しておきたいと考えています（自然担当 太田）。



ホリカワツボミゴケの雄株



細胞の中の細長い油体に眼点(瞳のような粒)が見える

